

第6回研究実践奨励賞

◆受賞のことは◆

社会の変化について考える ～第6回研究実践奨励賞受賞によせて～

富吉 貴浩

(コミュニティ福祉学科 2003 年卒業)

この度は研究実践奨励賞に選出いただきありがとうございます。研究とは程遠い内容でありましたが、お選びいただいた関係者の皆様に感謝申し上げます。

昨年のリレーメッセージの中で、社会の変化に対応するためには柔軟でいなければならない、そのためには学び続けることが必要ということをつらつらと書きましたが、わずか一年後にここまで劇的な社会の変化に直面することになるとは想像しておりませんでした。コロナ禍において、買い物や旅行、飲み会、そして人と気軽に会うことですら、実は当たり前でなかったと気付かされました。毎日の通勤時間ですら、必ずしも当たり前のものでなくなりました。一方で、これまで無縁だった Zoom や Webinar という言葉を日々当たり前のように使うようになりました。多くの企業でなかなか浸透しなかったテレワークは、もちろんすべての業種ではありませんが、一気に導入が進みました。働き方改革が叫ばれて久しいですが、「無理に決まっている」「他の人に何と言われるか」「どうやって管理するんだ」等のやれない理由は、状況が差し迫れば、なんだかんだ言いながらあつという間に乗り越えてしまいました。壁は、自分たち自身が作り出していたのかもしれませんが。

社会の変化は、これまでの安定した居心地の良さが揺さぶられることでもあります。すんなりと適応できた人がいる一方で、適応が難しい人もいたかと思います。これは単に今回の変化がツールや制度の変化に留まらず、多くの人にとって働くこと、もっと言えば生きることそのものに対する価値観を改めて直視させられたからだったのではないのでしょうか。

コロナ禍を通じてもうひとつ感じたことは、ウイルスそのもの以上に恐ろしいことは、恐怖は人と人との関係を、社会を容易に分断しかねないということです。一方で、閉塞感の中で人が前を向いて生きていくためには、その先に、トンネルの出口に見える光のような、希望が必要だということも実感しました。渦中ではそんなことを軽々しく言えませんが、将来振り返って、この時期が意味あるものであったと思えるよう、そしてその光を作る一助になれるよう、柔軟に過ごしていきたいと思います。

皆様もどうぞくれぐれもお気をつけてお過ごしください。